

Ch. 4 Self and other exemplars as standards for judging others. 他者を判断する際の基準としての自己と他者事例

Monica Biernat (2005) *Standards and expectancies. Contrast and assimilation in judgments of self and others.* Essays in social psychology. Psychology Press.pp.53-74.

Rep. 小森めぐみ¹.

本章の内容

- ・ 本章では、他者判断における自己の役割に焦点をあてる
- ・ 他者評価の際に自己が参照点となることは、多くの研究で言われていること
 - Helson(1964): 感覚が判断に与える影響を強調しつつも、個人の態度や信念がその人の一般的“適応レベル”の一部であり、後続する経験や判断に影響することを認めている
 - Hovland and Sheriff(1952)の社会的判断理論など: 他者の評価や他者の態度スタンスの知覚は、自分自身の態度の影響を受ける(その他 Eiser & Mower White, 1974; Eiser & Stroebe, 1972; Insko, Murashima, & Saiyadain, 1966; Judd & Harackiewicz, 1980; Lord, Ross, & Lepper, 1979; Upshaw, 1962, 1969; Zavalloni & Cook, 1965; see Eiser, 1990, for a review にも同様の主張)
- ・ 別の研究では、他者や集団を評価する際の自己の役割を強調する
 - 社会的環境の処理において自己は特別な役割(Rogers, 1981; Rogers, Kuiper, & Rogers, 1979)
- ・ 本章では3つの分野の研究を紹介
 - (1) 類似性評価における“習慣的参照点”としての自己の役割(Holyoak & Gordon, 1983)
 - (2) 特定の他者の描写に自分自身の属性を使用する傾向
 - (3) フォールス・コンセンサス効果(FC 効果)とフォールス・ユニークネス効果(FU 効果)
- ・ 最後に、他者判断における他者事例(自己を除く)の役割について検討する

類似性判断における自己 (P.54)

二つの選択肢の類似性判断

- ・ 二つの選択肢A・Bの類似性を判断する際(AはBにどれくらい似ている?)、Bは参照基準、Aは比較対象となる。AとBの役割は、質問の単純な変形“リフレーミング”(BはAにどれくらい似ている?)で反転しうる
- ・ 類似性判断では、判断に非対称性が生じることが指摘されている
 - “習慣的参照点”となっている選択肢=親近性、顕現性が高くプロトタイプ的なものを、そうでないものと比べるほうが、逆よりも類似性が低いと判断される(Holyoak & Gordon, 1983, p.881)。例)アメリカ人にとって、オーストラリアはアメリカに類似しているが(同化を反映)、アメリカはオーストラリアにそれほど似ていないと判断される(対比を反映)
- ・ 上記の比較については、国家の類似性知覚に注目した Tversky(1977)の対比モデルに詳しい
 - 類似性評価の比較対象に備わる、共有された or 独特(非共有)な特徴の果たす役割に注目
 - 選択肢Aに対してより多くの情報がある(=より独特で目立つ情報がある)場合、AをBと比べる方が、BをAと比べるときよりも類似性が低いと判断される
- ・ 他の研究者たちは自己を参照点として使用した場合の社会的判断の非対称性に注目(Holyoak & Gordon, 1983; Karylowski, 1990; Karylowski & Skarzynska, 1992; Srull & Gaelick 1983)

¹ 一橋大学社会学研究科

- 10 の社会的・物理的次元で自己と友人の類似性を判断させたところ、“友人はあなたと比べて”のほうが“あなたは友人と比べて”よりも類似性が高いと判断された(Holyoak & Gordon, 1983, study 1; see Holyoak & Kah, 1982; Rosch, 1975; Tversky & Gati, 1978; 非社会的次元については Sadalla, Burroughs, & Staplin, 1980)
- つまり友人は自己に類似し(同化)、自己は友人に非類似(対比)と判断されやすい
- この傾向は判断の前に自己知識がプライムされると強まる(Karylowski & Skarzynska, 1992)

なぜ?①親近性

- ・ 記憶における自己参照効果は、自己概念のユニークさではなく、認知的組織、豊富さ、親近性によって説明されている(see Greenwald & Banaji, 1989; Kihlstrom & Klein, 1994)
- ・ 判断の非対称性も同様の特徴、特に親近性によって説明(Catrambone, Beike, & Niedenthal, 1996)
 - Holyoak and Gordon(1983)study 2: 自己を9つのステレオタイプと比べたときの類似性判断とその逆の類似性判断を比較。その結果、判断の非対称性はすべての比較で見られたわけではなく、効果サイズの大きさは、参加者が対象集団についてもっていた知識の量(挙げられた属性の数)で説明ができた。(記述された属性が多いほど、比較の非対称性は低減)
 - “多くのことが知られていないステレオタイプに対しては、自己は習慣的参照点として機能するが、多くのことが知られているステレオタイプは自己とおなじくらい参照点として目立っているのだろう”(Holyoak & Gordon, 1983, p.886)

なぜ?②-1. ユニークネス

- ・ 自己はユニークだと考えたいという動機的要因が非対称性をうみだしているという説もあり
 - Codol, Jarymowicz, Kaminska-Feldman, and Szuster-Zbrojewicz, (1989) 類似性判断の非対称性は、“自己のアイデンティティの高揚と防衛のサイン”として解釈可能
 - 対人距離判断の研究では、“他者は自己に”の方が“自己は他者に”より近いと判断される
 - “他者は自分のスペースを占拠しているが、自分は他者のスペースを占拠してはいないと考えているようだった”(Codol, 1985)
 - この非対称性は空間内の密度の上昇や実際の距離が縮まるにつれ増加するため、防衛プロセスの反映とも考えられている(Codol, 1985)

なぜ?②-2. アイデンティティ

- ・ 自己と他者の類似性判断は We (内集団)と他者の類似性判断よりも非対称性が大きいことから、アイデンティティ防衛の説明を採用している研究もある
- ・ 以下の場合、非対称性は大きくなると考えられている(Codol et al., 1989)
 - 自己が他者と比べてより目立っていると考えられている場合
 - 生まれつき“endocentric”(他者の視点をとることができない)である場合
 - 高密度の空間で脱個人化が生じていると参加者が感じた場合

なぜ?総括

- ・ 特徴マッチングモデル(Tversky, 1977)と動機的要因の影響の区別は困難だが、他とくらべると自己は一般的に使われる、よく知られた参照点であることは一致を見ている

- 他者が自己と比較される場合には、類似性は高いと判断される⇒他者が自己に同化
- 自己が他者と比較される場合には、類似性の低評価、物理的距離、楽観主義が増加⇒対比
- Codol(1990)は前者を、人が“他者は自分と同じカテゴリーに属する”と知覚しやすいために生じている“自己中心的な同化プロセス”と呼び、後者を“自己は他者と同じカテゴリーに属する”と知覚しないために生じていると説明(Codol, 1990; p.391)
- Codolの動機的説明は、カテゴリー化プロセスやSchwarz and Bless(1992a)のinclusion-exclusionモデル(3章)がもととなっている
 - 他者を自己にカテゴリー化⇒同化、他者を自己から除く(自己が比較対象となる)⇒対比

他者の判断に自分自身の属性を使用する (P.56)

本節の内容

- 前節では、判断が明確に指示されている場合を述べたが、本節では、特に自己を利用するよう直接教示されていない場合の他者判断における自己の役割について

同化効果の例

- このような研究の例として、特性判断における自己と他者の関係についての研究がある
 - 自己関連の属性は非関連の属性よりも他者に関する自由記述で登場しやすい(e.g., Dornbush, Hastorf, Richardson, Muzzy, & Vreeland, 1965; Lemon & Warren, 1976; Shrauger & Patterson, 1976)
 - ある属性について自己を極端に判断する参加者は、そうしない参加者よりも、曖昧または属性に一致するターゲットにその属性を高く帰属する(e.g., Carpeno, 1988; Catrambone & Markus, 1987; Lambert & Wedell, 1991; Lewicki, 1983; Markus, Crane, Bernstein, & Siladi, 1982; Markus & Smith, 1981; Markus, Smith, & Moreland, 1985)
 - 架空の人物が学習状況に接近する方法は自分と同じと判断しがち(Kawada, Oettingen, Gollwitzer, & Bargh, 2004)
- 上記の傾向は特性の重要性や行動への感情的反応を統制しても生じる(Lambert & Wedell, 1991)
 - 自分を“社会的”と記述した参加者は、そうしなかった参加者と比べて、社交性が曖昧なターゲット(家に留守電を入れた、平和部隊への参加を決めた)を社会的と判断した。
 - この傾向は社交性の重要性和ターゲットの行動への評価の極端さの要因を排除したあとでも同様に見られた(Lambert & Wedell, 1991, Study 1)

対比効果①曖昧さ、明確さの影響

- 他者を自己と異ならせる、または対比する状況もあることも指摘されている
 - ターゲットが自己関連の特性を持たないことが明確な場合(図 2-1, 9 参照)
 - “独立図式(independent schematic)”は aschematic よりも、独立的に行動したことがない行為者をより依存的和判断(Makus & Fong, 1979, cited in Markus & Smith, 1981)
 - ターゲットの行為が個人の受容範囲を越えている場合(例えば、独立的な人にとってとても依存的な行動)、その行動は特徴的と捉えられ、対比される
- 最近の研究では(Lambert & Wedell, 1991)、非曖昧な行動の判断を媒介しているのは、特性についての自己の立場ではなく、他者の行動に対する自己の評価反応の極端さと指摘
- 上記の研究は、accentuation 理論(刺激への反応はその行動の暗示する価値に応じて極化される)に一致(Eiser, 1990; Eiser & Stroebe, 1972; Judd & Garackiewicz, 1980; Tajfel, 1957)

対比効果②定義の問題

- 特性概念の“自己中心的定義”によって対比効果が生じるという研究もある(Dunning, 1993; Dunning & Cohen, 1992; Dunning, Meyerowitz, Holzberg, 1989)
 - ある属性(e.g., 知性)に関係する自分の客観的立場(e.g., SAT 得点)と他者(SAT 得点は既知)の主観的判断(知性判断)は、負の関係(Beauregard & Dunning, 1998; Dunning, 1993; Dunning & Cohen, 1992; Dunning, Perie, & Story, 1991 see also Felson, 1990)
 - athletic な参加者ほど、athletic なターゲットのことをスポーティーではないと判断。この対比効果は、ターゲットが low-athletic な場合にもっとも顕著(Dunning and Cohen, 1994)
 - 運動をしない参加者と比べて、運動をたくさんする参加者は、ターゲットを運動次元で非好意的に判断(see comparable findings in Lambert & Wedell, 1991; Markus & Smith, 1981)

自己中心的な対比効果プロセス

- Dunning(1993)で指摘された対比効果は、人は“自分自身に好意的にはねかえってくるように”特性を定義する、つまり自己奉仕的といえる(Beauregard & Dunning, 1998, p.608)
 - 好成績の個人はその次元でのパフォーマンスに高基準を設定して、成績の悪かったターゲットを弁別し、彼らの得点の低下にともない、彼らを過小評価
 - それによって、自分のパフォーマンスや能力が肯定的に弁別され、自己の価値観が高まる
 - 悪成績の個人はその次元でのパフォーマンスに低基準を設定して、ある程度の“リアリティーの制約”があっても、その特性に自分も“あてはまる”と判断されやすくする(Kunda, 1990)

⇒高得点のターゲットがあまり区別されなくなり、自己も含めた全てに優れた属性があてはまると判断される(“天才効果”: Alicke, LoSchiavo, Zerbst, & Ahang, 1997 参照)

自己中心的な対比効果プロセス調整要因

- “自己中心的対比効果”はターゲットと自己を比較したと口にした参加者 (Dunning & Hayes, 1996)や、高自尊心者(Dunning & Beauregard, 2000)、自尊心が脅威にさらされた場合(Beauregard & Dunning, 1998) にもっとも強く見られることがわかった
 - Beauregard and Dunning(1998, study 3)では、中絶に強く賛成する参加者が、比較的中絶に賛成よりの意見を表明したターゲットを評価する態度研究の古典的パラダイムを使用
 - ターゲットの意見を自分の意見から対比する(非合理的で中絶反対に近いと判断)傾向は、失敗経験の後でもっとも促進された
- Dunning らは、認知的要因(反応測度のアンカリング、自己のアクセシビリティ)の影響も認めつつ、自尊心の促進、防衛など動機的要因の影響を重視(Beauregard & Dunning, 1998, p.618)
 - “質問されている内容が個人にとって重要であったり自己定義にかかわるような問題である時には”、動機的要因が“自己主張をはじめ”

同化?対比?どっち?

- Dunning らの研究と Markus, Lambert and Wedell らの研究には大きな違いがある
 - Markus らは、他者判断における自己の同化効果を指摘し、Dunning らは、対比効果を指摘
 - Dunning らの測定した自己属性は特定の次元にかかわるパフォーマンスや行動(e.g., SAT 得点)を主観的に判断させた。Markus らはより大きな特性次元を使用(e.g., 知性、運動能力)

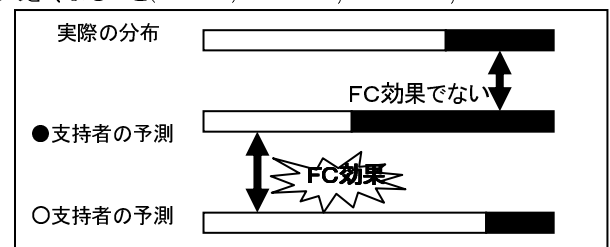
- 区別のつけやすい文脈は対比効果をもたらすため(2章参照)、特定の self-referential な基準に対しては対比効果が起こりやすいが、抽象的な self-view には同化が起こりやすい
- Beaugregard and Dunning (2001)では、区別しにくい自己評定(あなたはどれくらい友人を簡単につくれますか?)を用いた場合、対応する特性(e.g., 社交性)の他者評定は、自己評定に同化した。これは上記の説明と一致する結果

誤った同意性と誤った独自性効果 (P.59)

- FC効果:他者が自分と同じように行動したり感じたりする可能性を過大視する傾向(e.g., Alicke & Largo, 1995; Marks & Miller, 1987, Mullen, Atkins, Champion, Edwards, Hardy, Story, & Vanderklok, 1985; Mullen & Hu, 1988, Nisbett & Kunda, 1985; Orive, 1988; Ross, Greene, & House, 1977)
- FU効果:自分の属性が共有されている程度を過小視する傾向(Campbell, 1986; Goethals et al., 1991; Marks, 1984; McFarland & Miller, 1990, Miller & McFarland, 1987; Perloff & Brickman, 1982; Suls & Wan, 1987; Suls, Wan, Barlow, & Heimberg, 1990; Suls, Wan, & Sanders, 1988)
- 上記の二つの現象は、それぞれ同化効果と対比効果を取り扱ったものだが、集団の予測を行うという点で、これまで説明してきた研究とは異なっている

フォールス・コンセンサス効果—記述と説明 (P.60)

- 操作的定義:特定の行動Aをとると決めた個人が予想する、行動Aをとる人の割合予測が、別の行動Bをとると決めた個人が予想する、行動Aをとる人の割合予測よりも大きくなること(Mullen, Driskell, & Smith, 1989, p.84)
- 実際の値からのばらつきではなく、異なる属性を自己報告した個人の、他者予測の違いを指している(同タイプの誤りについては、Gross & Miller, 1997)
- 行動、特性、思考、信念、個人的問題など様々な分野で報告(see Marks & Miller; Wallen, 1943)
 - サンドイッチマンになることに同意した参加者は、同意しなかった参加者よりも、同意する参加者の割合を高く予測(Ross et al., 1977)
 - 節水令が出ている時にシャワーを浴びた人は、浴びなかった人と比べて、シャワーを浴びた人を多いと予測(Monin & Norton, 2003)
- 類似概念:同化効果、社会的投影(Allport, 1924)、属性的or同化的投影(Berkowitz, 1960; Holmes, 1968, 1978; Murstein & Pryer, 1959)、仮定された類似性(Cronbach, 1955)
- 23の研究のメタ分析の結果では、信頼性の高い、中程度のFC効果が報告されている($R=.31$; Mullen et al., 1985; see also Krueger, 2000)
- FC効果は認知的にも動機的にも説明されるが、“単一の要因だけでは全てのデータは説明できない”(Marks & Miller, 1987;p.72)



認知的説明

- 選択的接触 and/or 認知的利用可能性(availability)と接触可能性(accessibility)の二つが、主な認知的説明(Bosveld, Koomen, & van der Plig, 1994; Goethals, Allison, & Frost, 1979; Manstead, 1982; Mullen et al., 1995; Ross et al., 1977; Sherman, Presson, Chassin, Corty, & Olshavsky, 1983)

- Dawes(1989)は、帰納的説明は、自分の行動が唯一の利用可能な情報かもしれないことを指摘
 - 自己が対象集団からランダムに選ばれた一人と同じなら、それを多数派とすることは合理的
 - 人は外集団よりも内集団に投影しがちであるので、類似性の仮定が影響しているかもしれない (Bosveld, Koomen, & van der Plight, 1996; Bramel, 1963; Messe & Sivacek, 1979; Mullen, Donidio, Johnson, & Copper, 1992; Spears & Manstead, 1990)

動機的説明

- 自分の立場の正しさや、自尊心の防衛、円滑な相互作用の促進などの動機からFC効果が生じる (Agostinelli, Sheman, Presson, & Chasiin, 1992; Sheman et al, 1984; see also Holmes, 1968; and Marks & Miller, 1987 for a review.)
 - 失敗の偽フィードバックを受け取った参加者は、成功フィードバックを受けた参加者と比べて同じ課題に他者も失敗する確率を過大視
 - “自己が脅威にさらされた場合、標準化あるいは自己の行動への支持を得るために、コンセンサス効果が増大するのかもしれない”(Sherman, et al., 1984, p.127)
 - Krueger and Stanke(2001)は、他者を内集団に投影する傾向よりも自己を内集団に投影する傾向が強いことを示し、この傾向を知識のアクセシビリティとカテゴリー化効果で説明

フォールス・コンセンサス効果の調整要因

- 意見の極端さ、確実さ、関連性とはFC効果に正の影響をもたらす(Crano, 1983; Marks & Miller, 1985; van der Pligt, Ester, & van der Linden, 1983)
 - 扱われた問題に強い関心をもつ参加者は、そうでない参加者と比べて、他者の意見を予想する際にFCを強く示した。この結果は他集団には拡張せず、また、態度の極端さを統制しても見られた (Crano, 1983)
- ある問題に対して強い意見をもつとき、他の人が異なる意見をもつことに気づきにくくなるのかもしれない (see also Gilovich, 1990)

知覚的説明

- Krueger(1998)は自己中心的知覚過程(egocentric perceptual process)の存在を主張
 - 同意の知覚は、刺激の初期段階の符号化のプロセスの一部であり、高次の処理過程の所産ではない (Krueger, 1998, p.202)
- FC効果の調整要因の多くは十分条件だが必要条件ではない (see also Clement & Krueger, 2000)
 - たとえば、教示(選択されなかった行動の顕現性を高めるなど)によってFC効果を減らすことは出来るが、完全消去はできない (e.g., Marks & Duval, 1991)
- 3つの要因を指摘
 - ① 知覚者は自分の反応と他者の反応の予測の間の連合に無自覚(Krueger, 1998)
 - ② 自分自身の反応が同意予測を促進する(逆方向と比べて; Clement & Krueger, 2000; Krueger & Stanke, 2001)
 - ③ FC効果は無意図的で、統制しようとしても消えない(Krueger & Zeiger, 1993; Krueger & Clement, 1994)
- “投影が起きるのは、自分には特権的な立場が保証されているものと思っており、それは幾重の経験の重なりから裏打ちされていると考えているから”(Clement & Krueger, 2000, p. 288)

フォールス・ユニークネス効果 (P.62)

- ・ ある母集団における自己の属性の普及が過小視される傾向
- ・ 才能、能力、望ましい特徴で見られる。自分の美德は稀と知覚されやすい(Suls et al., 1990)
- ・ 実際値と比べてときの過小視をFUと呼んでしまう誤りが見られている(後者をユニークネスバイアスという別称を用いている研究もあり。see Monin and Nelson, 2003)。
- ・ FU効果はコンセンサス効果よりも稀であり、どちらの現象も生じそうな状況では、FC 効果が見られることがほとんど(e.g., Campbell, 1986; Sheman et al., 1984; Agostinelli et al., 1992)
- ・ Krueger(1998)はFU効果を“FC効果の稀な逆転”と呼び、その存在そのものを否定
- ・ これらの研究が同化効果が対比効果よりも優勢であることを示しているかは不確実だが、FC効果について知覚的、認知的、そして動機的影響が見られた知見が蓄積していることは確か。これらの主張を考えると、自己高揚がFUの引き金となっていると考えられる

FCとFUの同時発生

- ・ 最近の研究では、単一の判断でコンセンサス・ユニークネス両方が見られることが示されている“近視的社会予測(myopic social prediction)”(Moore & Kim, 2003)
- ・ 比較予測を、文脈内の他者ではなく、当該の行為者(つまり自己)に基づいて行う傾向
 - 簡単/難しいクイズで勝利の自信の強さに応じてお金を賭けるという実験で、勝利の可能性は変わらないのに(自分にも相手にも難易度は同じ)、簡単な競争ほど高額が賭けられた
 - 相手も自分と同じように難易度に影響されると考えていればこの結果は見られない。
 - しかし、自分の得点予想と他者の成績は相関。一方、他者の得点予想は回帰しており、自分の成績ほどには極端に予測されていなかった
 - “他人も私と同じようにふるまうけれど、少し控えめだろう”と予測したのだろう(Moore & Kim, 2003)
- ・ 自己以外でも当該の行為者については同様の結果が見られることから、(see also Eiser, Pahl, & Prins, 2001; Windschitl, Kruger, & Simms, 2003)、彼らはこの結果を注意の焦点から説明
- ・ FCもFUも注意の焦点の調整を受けているだろうが、動機づけられた自己中心主義の影響も同様に、これらに寄与しているだろう(Windschitl et al., 2003)

フォールス・コンセンサスとフォールス・ユニークネスの調整要因 (P.64)

- ・ 多くの研究者によって、二つの現象の調整要因が調べられている
 - 態度では同化、能力では対比効果が生じる(Marks, 1984)
 - 判断次元のバイレンス(道徳的に行いは過小視、利己的に行いは過大視, Allison, Messick, & Goethals, 1989; Goethals, 1986; Mullen & Goethals, 1990)。
 - メタ分析の結果、実際値が増加するとFC効果が小さくなることがわかった(Mullen & Goethals, 1990; see also Krueger, 1998)
- ・ その他、自分の立場の影響も指摘されている(Campbell, 1986; Goethals, 1986; Sigelman, 1991)
 - Campbell(1986)では、自己関連能力が低い者は高いものと比べて、強いFC効果を示す
 - スティグマ化された集団や他者の態度知覚において、耐性の低い者は高い者と比べて、強いFC効果を示す (Sigelman, 1991)

質問形式の影響

- ・ 質問形式を変えることで、単一の判断内容で両方の効果を出した研究もある
 - 二つの不快状況に対し、どちらを選択するかをはかるとFC効果が見られ、より嫌われた選択肢での感情的反応測定ではFU効果が見られた(McFarland & Miller, 1990)
- ・ Biernat, Manis, and Kobrynowicz,(1997)では、判断順序(自分が先か他者が先か)と判断形式(主観的性質か客観的性質か)の影響を検討
 - 共和党投票者は、民主党投票者よりも、共和党投票者の割合を過大視
 - 自己の主観的反応評定が先に来た場合は、自己が比較基準となるため、その評定が他者の客観的立場の判断(たとえば行動チェックリスト)とは負の相関を示した。一方、他者の主観的反応評定が先に来た場合は、自己の客観的立場の判断は対比された

構成概念の影響

- ・ FC効果とFU効果は判断対象の次元の construal(ポジネガ、範囲の広さ)に応じて生じることも指摘されている(Bosveld et al., 1996; Bosveld, Koomen, van der Pligt, & Plaisier, 1995)
 - 熱心なキリスト教徒はそうでないキリスト教徒や無神論者より、オランダ内のキリスト教徒の割合を過小視。この傾向は“キリスト教徒”を狭く定義する場合顕著(Bosveld et al., 1996)
 - 狭く、弁別的な構成概念は、広いものよりも対比効果を生じやすい(2章参照)
- ・ 自分の抱く構成概念と判断対象の母集団の構成概念が不一致の場合、両方の効果が生じやすい
 - 意味に“主観的構成”が占める割合が大きい項目ではFC効果が生じやすい(Gilovich, 1990)
 - “対抗意識が強いかどうか”は主観性が高く多次元で構成されているが、“長男/長女か”は客観性の高い属性
- ・ 人は、自分と他の人の抱く構成概念に違いがあっても、それを見落としがち
 - 昔の映画より最近の映画が好きだという人は、“最近の映画”についてのポジティブな事例だけを思いつき、他の人もそうだと考えてしまう結果、最近の映画を好きな人を過大視する(Gilovich, 1990; see also Bosveld, Koomen, & Vogelaar, 1995)

本当の過大視、過少視

- ・ Mullen and Hu(1988)のメタ分析の結果、少数派は、多数派と比較して、自分の立場の支持者を実際値よりも多く見積もりがちであることが判明(Gross & Miller, 1997; Krueger & Zeiger, 1993)
- ・ Gross, Holtz, and Miller(1995)は、Brewer(1991)の optimal distinctiveness model で説明
 - 多数派は自分の立場が安定しているので、社会的妥当性よりも個人の違いを求める
 - 少数派はすでに自分たちの独自性を感じており、自分の意見が正しいという確証を得たい
- ・ つまり、個人化されすぎていると感じる時には(所属欲求が高まり)他者を自己に同化するが、集団としてしか考えられていないと感じる時には(個別化欲求が高まり)他者を対比する
- ・ しかし、個人化や自分が例外であるという感じは、FC効果減少にもつながる(see Frable, 1993)

FC効果に矛盾はあるか？

- ・ Karniol(2003)はFC研究の矛盾を指摘
 - 自分の立場が明確な時には(例えば自分の選択や態度を先に表明)、FC効果は弱い(see meta-analysis by Fabrigar & Krosnick, 1995; Mullen et al., 1985; Mullen & Hu, 1988)
 - つまり、自己が顕現的な場合には、自他間の類似性は仮定されないということになる。自分と他者はかなり違うと考えられやすい(Codol, 1987; Holyoak & Gordon, 1983)という過去の研究を考慮すると、対比効果が起こりやすいように思える(Stapel & Koomen, 1998)

- ・ 自己が特徴的で顕現的な基準となる場合には、通常は自己を他者に投影しようとする(i.e.同化効果を生じさせる)すべての知覚・認知・動機的要因が抑えられる(ひっくり返るのではなく)ということだろう

補足:他者を判断する時でもときは己は考慮されないようだ (P.67)

- ・ 多元的無知:ある集団規範に対し、“自分は個人的には支持していないが、他のメンバーは支持している”と集団の大多数考えている状況(Katz & Allport, 1928; Miller & Prentice, 1996, p.804)
- ・ 自分の意見についてわかっているにもかかわらず、他のメンバーはそれとは違うように考えていると思いがち(Miller & Prentice, 1993, 1996)
- ・ 多元的無知は、個人が他者の行動(e.g., 過度の飲酒)は対応する態度(酒好き)に導かれていると考えるために生じる。本音で行動しない場合があることを経験上知っていてもこの傾向は頑健
 - Latane and Darley(1970)の傍観者は、個人的には動揺して非常事態を気にしてはいたが、他の人たちが静かにしているのを見て、他者は動揺してないと考えてしまった。
 - 節水令の規範に従ってシャワーを浴びなかった人たちは、他のシャワーを浴びなかった人は、地域に配慮したと考えた(Monin & Norton, 2003; for a review, see Miller & Prentice, 1996)
- ・ Miller and McFarland(1987)は、他者の社会行動も自分と同じように社会的プレッシャーによって生じうることを見落とす傾向を、FUで説明
 - 人は他者よりも自分に“内的”または私的特性(神経質、はにかみや、自意識過剰)があると考えやすい(対比的な影響)(Miller & McFarland, 1987)
 - 好ましくない状況におかれた場合、自分は他人よりも不快になりやすいと考えがち(McFarland & Miller, 1990)
- ・ このような形で、ユニークネス効果は多元的無知を引き起こしているのかもしれない

特定の他者事例表象に基づく他者判断 (P.70)

- ・ 知り合いである個人の表象も、他者を判断する際の参照点として使用されやすい。
 - “初対面の人は、知り合いなど特定の個人の事例の過去経験にあわせて経験される”(Andersen, Reznik, & Manzella, 1996)
 - これは、ターゲット他者が、これまでに遭遇した事例と一致する形で判断されるという同化パターンの存在を示す。しかしその一方で、事例は対比効果の基準ともなりうる(第二章)

他者事例と後続の判断

- ・ ある状況における人の判断は、以前に遭遇した類似した単一の状況または出来事に基づいて判断されることが多くの社会的認知の研究で指摘(Abelson, 1967; Nisbett & Ross, 1980; Schank & Abelson, 1977; Read, 1983, 1984; Wyer & Carlston, 1979)
- ・ つまり、一人の事例が記述的知識や経験をもつカテゴリーのように機能するということ(Higgins & King, 1981; Smith & Zarate, 1992)
- ・ 活性化された知識は、類似性の検知を通じて新ターゲットの解釈に使われる(Gilovich, 1981)
 - 人は、類推的な論理的思考を行って“過去を少し顧みて、その出来事が意味していたと思われることに基づいて現在を判断する”(Gilovich, 1981, p.798)
 - 有名な運動選手と共通点の多い選手は、好意的な記事を書いてもらいやすい
 - この傾向は、類似性の次元が implicit/explicit や関連/無関連にかかわらずある

- 類推ベースのモデルについては Read and Cessa, (1991), Spellman and hollyoak (1992)
- Read(1983)の研究によると、事前に呈示された人物事例とターゲットの類似性が高いほど、ターゲットも人物事例と同じ行動をとると判断されやすい。
- この傾向はターゲットが事例と共有する特徴が、事例の行動と因果的に関連している場合に促進
 - 新奇な儀式をとった原住民を見た後は、別の新しい原住民もその儀式をとるだろうと判断

事例はどう影響するか

- 上記の結果はデマンドである可能性も否定できないが、事前に呈示された事例が明白でない場合も、同じような同化パターンが見られる(Lewicki, 1985)
 - 参加者は、親切な女性実験者に説明を受けたあと/受ける前、2枚の女性の写真(実験者と類似/非類似)のうちどちらが親切だと思うかを判断
 - 説明を受ける前(60%)と比べて、説明後の参加者の方が(85%)類似写真を選択
 - 無礼な黒人に遭遇した後の方が、白人に遭遇した後や遭遇がなかったときと比べて、偏見的行動があった(Henderson-King & Nisbett, 1996, study2, see also White & Shapiro, 1987)
- 社会的な情報は、抽象的なスキーマにくわえて特定の個人や事例によって表象されており、その表象が後続の新しい出会いに影響を与えている(Smith & Zarate, 1992)
 - “類似性は、文脈から独立した、固定的な刺激の特徴とは考えられておらず、知覚者が刺激のどの次元に注意を配分するかによって異なる”(Smith & Zarate, 1992)
 - つまり、知覚者の動機や目標に応じてターゲットのある側面が注目され、その特徴について類似の事例が記憶に浮かんできた結果、“事例の情報がターゲットにあてはめられる”
 - たとえば、授業中居眠りをしている人を見た教師は、以前同じ行動をとっていた学生を思い出してその人を判断する。ただし、このときに注目されるのはある程度顕現性の高い特徴(髪の色や服装は事例の想起には使われない)

転移 (P70)

- 転移とは、重要他者への信念や感情が他者にうつされる現象(Andersen & Baum, 1994; Andersen & Cole, 1990; Andersen, Glassman, Chen, & Cole, 1995; Andersen, Reznik, & Manzella, 1994)²
- Andersen たちは、転移をターゲットについて“与えられた情報を越えて”(Bruner, 1957)、重要他者の表象を重ねる情報処理過程として概念化(Andersen & Baum, 1994; Andersen et al., 1996)
- Andersen et al., (1995)では、重要他者と一部特徴が類似する新奇なターゲットは、別の特徴についても重要他者と同じだと判断された
- 社会的ステレオタイプと特性カテゴリーも誤再認を引き起こす(Andersen & Cole, 1990)が、特定の重要他者のほうが強い影響をもたらす
- 重要他者と全く特徴を共有していないターゲットでも同化されうる(Andersen et al., 1995)
- これは、重要他者の表象が慢性的にアクセシブルになっていることを示唆(e.g., Higgins & King, 1981)。よって、この次元ではプライミングは転移を促進しない
- 最近の研究では、閾下で呈示された重要他者の表象がゲームのパートナーの印象に影響することがわかった(Glassman & Andersen, 1999)

² 本来は治療者に向けられるべきものではないが、患者が心の中に抑圧していた感情であり、これが、精神療法やカウンセリングの場で、治療者に対して向けられるという現象(<http://members.aol.com/Hikatana/ten-i1.htm>)

- ・ 好きな or 嫌いな重要他者に類似する新奇なターゲットへの行動的反応 (第三者による会話の friendliness 評定)が対応するという知見もあり(Berk & Andersen, 2000)
- ・ 重要他者の表象はターゲットに同化の方向で影響

対比? (P71)

- ・ 自己と他者事例には共通点がある(e.g., see Hinkley & Andersen, 1996; Prentice, 1990)。
- ・ 他者表象が自己に対比されるという知見は重要他者表象の研究とは矛盾しない
- ・ 重要他者の表象は、比較基準ではなく解釈の枠組みとして使用されているのかもしれない(Stapel & Koomen, 2000)。
 - 重要他者の表象は、新奇なターゲットに遭遇した際、感情や、認知リンクに影響してターゲットの属性を符号化する(Andersen et al., 1996)
- ・ 2章であげられた研究を考えると、重要他者(と他者事例一般)は、対比効果を生じるはず
 - 事例は、明確で定義範囲が狭く、曖昧さの少ない(極端な)ことがある。この場合は事例は比較基準として使用され、対比効果を生じるのだろう
- ・ 特定の個人の事例(e.g.,ヒトラー、ガンジー)を使用したプライミング効果の研究では、対比効果が見られていた(Herr, 1986; Herr et al, 1983; Stapel & Koomen, 1996)
 - 重要他者は entitative であること、つまり一貫性が期待され、認知されている存在。Entitative なプライムは同化効果を生じやすい(Hilton & von Hippel, 1990)
 - プライムへの気づきは修正過程をアクティブにするために、対比効果を生じさせるが(Lombardi et al., 1987; Martin, 1986; Strack et al., 1003; Wegener & Petty, 1997)、転移では、知覚者がターゲットと重要他者の類似性を自覚していない。
 - ターゲットと重要他者の類似性が意識されれば、対比効果が生じるかもしれない

サマリー (P.72)

- ・ 本章では、他の個人や集団の判断基準として、自己や他者の事例が様々な方法で使用されることを示した。
- ・ 自己を基準とした判断の結果は、判断が下される場面の性質に応じて、同化か対比のどちらかに分かれる(図 4-1 参照)
- ・ 類似性、ターゲットの曖昧さ、自己の aspect の範囲(広範か独特か)などは同化を導く
- ・ 同化効果の認知的説明として知識のアクセシビリティが指摘されている。自己と重要他者の表象は、他者を判断する際の解釈の枠組みとして使いやすい状態にあるということ
- ・ 自尊心の防衛、所属欲求、分化(differentiation)、社会的妥当化欲求などの動機的要因も同化効果や対比効果をもたらす
- ・ 自己がかかわってくると、ホットな要因もコールドな要因も問題になってくる。自己というものは、馴染み深く、アクセシブルで顕現性が高いもので、情緒的な充電を遂げた基準であり、他者が自分と似ているかそうでないかを判断する際に影響を与える